
モンスター・ハンター・・シスターズ

五円玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター・シスターズ

【NZコード】

N7664Z

【作者名】

五円玉

【あらすじ】

ユクモ村在住の若きハンター、コウ。彼は村唯一のハンターとして日夜狩猟に勤しんでいた。……そんなある日、ユクモ村に観光に来た3姉妹の旅人ハンターと出会う。ちょっとした事故から、3姉妹とコウは共に狩猟へ行く事となり…… モンハン舞台にバトルあり、ドラマあり、はたまたラブコメありの短期集中連載なのです！

第1話・VS青熊獣1（前書き）

恐ろしくも、約2年ぶりにモンハンの小説を書く事になりました。
作者の五円玉です。

前回のモンハン小説は奇跡的な程の駄文だったので、新たに心機一
転、短期集中連載という形でまたモンハン小説描いてみました。

ちなみに第1話ではヒロインの3姉妹はまだ出てきません。

……では、とりあえず、第1話です。

第1話・VS青熊獣1

俺は、大地を駆けていた。

透き通る川の水は緩やかに流れ、四方八方に生い茂る樹々は赤、黄
色を中心に明るく染まり、綺麗なグラデーションの葉のカーテンを作りだす。

舞散る落ち葉は風に乗り、地面や川にゆっくりと積もっていく。

所々に口ケの生えた岩は川の水面から顔を出し、水の流れを不規則
に変動させていた。

樹々の向こうに広がる、断崖絶壁の崖と山。

川は、山と山の間に広がる「渓流」と呼ばれている場所。

風は優しい。

空は蒼く、雲がポツリ、ポツリと点在していた。

まるで秋を感じさせられるような、赤色に色づく川の渓流。

今、この渓流で俺は戦っていた。

……何と？

……熊と。

「あ、ヤベッ、肉持つてくんの忘れた！」

俺は川近くの岩に腰掛け、その腰にぶら下げる「アイテムボーチ」を覗き、落胆した。

……肉がない。

この漢字含めた4文字を見る限り、なんか鍋パーティーとかで肉を買いたれたちよつとドジな少年的なイメージを彷彿させるかもしれない。

……俺は何を言っているんだ？

しかし、ここは鍋パーティー会場ではない。

野生の凶悪な「モンスター」が数多く生息し、そしてそのモンスターを狩猟する「ハンター」達の狩り場、渓流なのだ。

肉がない……つまり食料がない。

すなわち……腹減り、スタミナの回復手段がない。

凶悪なモンスター達に対し、スタミナがない状態で対峙する事……すなわち危険！

その時、

「グオオオオオオオンツ！－！」

背後から木靈する、野生の叫び声。

俺は、冷や汗滴る背中に気配を感じ、恐る恐る背後へと振り返る。

そこには……

「グオオオツ！」

「あつ……」

青い毛皮に、鈍い瑠璃に輝く甲殻。腕にはトゲのついた腕甲。

目はつり上がり、巨大な口には無数の鋭い牙。

……簡単に言つと、青色の凶悪そうな熊。

こいつの名前は「アオアシツ」。

ハチミツ大好き、凶悪な好戦的獣。

ハンターである俺の、今日のターゲット。

なんだけど。

「…………」

「…………」

お腹空いた。

今俺、スタミナが……

「グオオオオオオオオッ！－！」

ただただ空腹に呆けている俺を見下ろし、アオアシラは咆哮をあげ

「ボオオンッ！」

その強靭かつ堅そうな腕甲付きの腕を振り回してきた。

その際、アオアシラは4足から2足歩行の体勢をとり、その場で一気に立ち上がった。

その大きさ、俺の1・5倍はあるのでは？

「うおおおッ！－！」

俺は咄嗟にその場から飛び、アオアシラの腕をかわす。

「あ、危なっ！」

そう言いつつも視線はアオアシラに向ける。

ちょっとでも油断したらいけない！

一方のアオアシラは腕を振り回したその勢いで少し前進。

そして攻撃後の僅かな硬直時間。

俺は一気に背中から一対の短剣……「双剣」を抜き放った。

双剣 それはハンターがモンスターを狩る時の武器の一つ。

短剣を両手に持ち、その手数で一気にモンスターを斬りつけ倒す、攻撃特化型武器だ。

それゆえ防御の技が何一つなく、モンスターの攻撃を防ぐ事は出来ない。

モンスターの攻撃は回避するしかないのだ。

「……いくぜッ！」

俺は双剣 この渓流で取れる特産の木や、火山で採掘することの出来る鉱石などをふんだんに使ったシンプルな刀……「真ユクモノ双剣」を構え、一気に斬りに掛けた。

「おおおおおおおおおおッ！」

全身に力を込め、右左と交互に斬撃を放つ。

「グオオオオオオオつ！」

アオアシラは斬撃の初撃に反応。咄嗟に身を引き、勢いをつけて一気に爪を立て掴みにかかる。

が……

「……甘いねつ」

俺はそれを身を引く予備動作で察知し、その場から右へ回転回避。

瞬間、アオアシラの腕は1秒前まで俺のいた虚空をかすつた。

そしてその一瞬の硬直時間にも、俺は次々に斬撃を叩き込む。

左右、右左からの両手斜め上斬撃、右左、そして回転斬撃。

合計8ヒット。

それはアオアシラの左脇腹に入り、着実にダメージを与える。

「グオオオンッ！」

あまりの斬撃にアオアシラは一瞬怯んだ。

俺はその隙を見逃さない。

「一氣にいくぜつ、アオアシラッ！」

双剣両方の切つ先をアオアシラに向け、一気に斬りかかる。

そして斬り上げ、左右へと斬撃、そして回転斬撃。

流れるような高速連続攻撃。
これこそ双剣の醍醐味。

「ガオオオオオン！」

斬撃の痛みに耐えられなくなつたアオアシラは無茶苦茶に腕を振るう。

しかし……

「遅い！」

俺はすぐさま回転回避でアオアシラの攻撃を避け、背後をとる。

アオアシラはその体の大きさ故、咄嗟に振り返る事が出来ない。

そこへ、俺はさらに追撃を仕掛ける。

「うおおおおおおおお！」

しっかりと双剣の柄を握り、様々な角度からの連続斬撃
特有の技「乱舞」を放つた。

双剣の刃はアオアシラの堅い甲殻を貫き、その血しぶきが辺りに散つた。

「グオオオオオオンッ！」

その時、アオアシラの目が鋭さを増した。

その身体からは殺氣が満ち溢れ、先程とはうつてかわっての変貌。

怒り状態。

モンスターだつて生き物だ。

嫌な事やうざつたい事をされれば怒る。

怒り状態時のほとんどモンスターは、攻撃力や俊敏性が増すといった傾向がある。

怒り時のバカ力、がむしゃら、とにかくそんな感じ。

怒り状態になつたモンスターはかなり手強い。

しかし。

「面白い、かかつて来いよ熊さんつ！」

俺は双剣を抜刀したままアオアシラに一気に駆けよる。

相手が怒り状態で能力が上がるなら、こっちにも秘策はある。

俺は怒りに身を任せ突進してくるアオアシラに、思いつきり突っ込んでいった。

この素材を使って強い武器や、モンスターの攻撃からハンターの身

どれもこれもが鋭く、堅い。

俺は荷車の後ろに積まれた、アオアシラの素材に目をやる。

「……しつかし」

ちなみにガーグアは羽はあるが飛べない鳥。
その分脚力は凄く、この通り人を乗せた荷車を樂々引っ張れる程。

ガーグアという丸い鳥の引く馬車……ならぬ鳥車に揺られ、俺は村へと急ぐ。

俺は溪流から俺の居住している村「ユクモ村」への帰路についていた。

「ああ……お腹減ったあ……」

あれから数時間後。

体を守る「防具」を作つたりするのだ。

そして俺が身に付けている防具 「ボロスシリーズ」と言つ、茶色いゴツゴツした防具は、砂漠や砂原などに生息しているモンスターから取れる素材で作った防具だ。

ボロスシリーズを一通り揃える、と言つ事は初心者から中級者になつたばかりのレベルを示す。

ボロスシリーズの大元となつてゐる素材は、「土砂竜」と呼ばれているモンスターから取れるのだが、その土砂竜の強さは先程仕留めたアオアシラの比ではない。

アオアシラは大型モンスターの中でもかなり弱い部類に属し、そのアオアシラから取れる素材で作った防具「アシラシリーズ」なんかは主に初心者が纏う防具だ。

そして土砂竜は中級者レベルのハンターが狩るようなモンスター。

よつてその土砂竜から取れる素材で作られたこの防具纏つてゐる俺は、まあ中級者レベルのハンターだつて事だ。

分かつてくれた?

俺は今回、村の近くの渓流でアオアシラが確認され、なおかつ村に近付いて来ていた事から村人の安全を考慮し、討伐へと向かつたのだ。

このアオアシラの素材は……売つてお金にし、生活の足しにでもする予定。

「ふああつ……お腹減つたし、眠い……」

暖かな日差し。
程よい疲れ。

俺はガーグアに繋がれた手綱をしっかりと握り、睡魔と戦いながらユクモ村へと向かうのであった。

第1話・VS青熊獣1（後書き）

多分第3話辺りまではモンハン未経験者のために、説明文が多くなると思います。

うん、しちがいよね。

ユクモ村。

渓流の近くに佇む、小さな村だ。

村には今、大量の紅葉が程よい色づきで、村一面真っ赤な状態だ。

村の家や建物はほとんど木造、土壁。
屋根などは紅葉の如くの赤色が多い。

他の大陸で言う、中華みたいな雰囲気の村だ。

ユクモ村は温泉の名所として知られている。

渓流付近の土地は温泉の出が良いらしく、このユクモ村の収入の大部分は温泉などの観光から成り立っていた。

もちろん天然温泉。

その効力は多岐にわたる。

村中硫黄の匂いブンブン。

……まあしかし、ユクモ村は渓流を登つたさらに上有る。

すなわち、山奥。

そのためここに来る観光客はよっぽどの温泉好きか、渓流で狩りをする流浪ハンターの付き添いなどが数日停泊する程度のもの。

そのため観光客は少なく、実のところ村の財政は赤字。^{らじー}

しかも若者は次々に都会に出て行ってしまい、村人の高齢化も進んでいる。

申し遅れた。

俺の名前はコウ。

このユクモ村で生まれ、このユクモ村で育ってきたハンターだ。

今年で18歳。

このユクモ村唯一の定住ハンターだ。

先に言つておくと、ハンターには戦闘スタイルや武器による職種分けなんかもあるけど、基本的には3つのパターンのどれかには当たる。

村や町なんかに家を構え在住し、その村や町を拠点に狩りを行う在住型ハンター。

拠点を置かず、あちこちを旅しながら各地で狩りを行う流浪ハンタ

一。

そして、「ギルド」と呼ばれる組織に加入し、軍のよつて事務的な狩りを行うギルドナイトハンター。

基本ハンターは、ギルドにてハンターとして公認されないと狩りなどをしてはならない。

モンスターの素材の密輸や、モンスターの狩り過ぎによる絶滅を防ぐためだ。

そして、ギルドにて公認されたハンターは、村につくなり旅に出るなり自由。

まあ、ギルドナイトになるには他にさうに特別な試験なんかもあるみたいだけど……詳しく述べは分からん。

とにかく、俺は唯一のゴクモ村在住ハンターなのだ。

「……ん？」

渓流にてアオアシラ狩りをした翌日の朝。

朝の空気は澄んでいて、呼吸が肺に響く。
まだ朝日の位置は低い。

普段はまだ寝ている時間だが、外からの物音によつて目覚めた。

ちなみに俺は1人暮らし。

家の位置はユクモ村のギルド支店のすぐそば。

ユクモ村ギルド支店が村の北側の高台にあるので、まあその辺り。

両親は元々村育ちの在住ハンターだったが、父親はギルドナイトに加入し今は都会。

母親はハンターを引退し、今は父親と共に都会で暮らししている。

回りから見たら、息子だけ田舎の村に置いていかれたかのように見えるよね。

けど実際は、両親に俺の実力が認められ、これなら故郷の村を任せられるという、そんな感じの意味なのだ。

俺の実力を信じ、村在住ハンターだった両親は村の事を俺に託し、ギルドナイトとして都会へと出て行つたのだ。

だから、俺としては別に苦ではない。

村の人達はみんな優しいし、親切だし。

ただ、今村在住ハンターは俺ただ1人。

すなわち、村をモンスターから守る戦力が1人しかいない事になる。

ユクモ村近くの渓流なんかでモンスターが大量発生なんかすると、全部に手が回らなくて結構大変。

なので正直、もうあと数人この村にもハンターが欲しい。

それが現状。

「……ようこそ」

話を戻す。

まだ朝早くのユクモ村。

こんな時間に起きているのは農業関係の人か、宿の従業員か。

しかし、外から微かに聞こえるその声は、女性の声。

この声……多分村長だろうか。

人間誕生の遙か前からこの大陸に住まう「竜人族」の女性で、まつたりした人だ。

「……誰かと話しているのか?」

俺は部屋の布団に入つたまま、外へと聞き耳を立てる。

「……わざわざ遠い所から、よくおいでになられて」

「いえ、じつも半分は温泉田当でですし」

……村長の話し相手は、声的に女性？

ソプラノの通つた、透き通るよつた声だ。

「それに、観光なんかも田当でねえ〜

……あれ？

今度はさつきとは違う、何かスローテンポな声？

「あたしは狩り！ そのために来たんだもん〜」

は？

今度はまだ幼さの残る、けど元気そうな声？

「まあまあ、3人共に元気がよろしくて」

これは村長の声。

どうやら、3人程の観光客が来たらしい。

なんだ、観光客か……と、俺は気を抜き、まだ朝早かつたので一度寝の体勢に入った。

そしてすぐに、また眠りへと入つていった。

第2話・VS青熊獣2（後書き）

バトル描写がかなりのスピード展開。

それが五円玉流。

あ、決して描くのがメンディとか、やつらのじやなぐて……うん。

第3話・VS 狗竜1

「でえいやあああつーーー！」

雲一つない空の下。

その日も俺は渓流にて狩り狩り。

真ユクモノ双剣の柄をしっかりと握り、ひたすらにモンスターと戦つていた。

「グアオオオオオオつーーー！」

ちなみに今日の相手はドスジャギイ。

薄い紫色の鱗に皮、頭には立派なエリマキ。

後ろ足での一足歩行、前足は後ろに比べて小さく、胸の前で揃えられている。

口には無数の牙。

肉食トカゲみたいな風貌のドスジャギイ。

ドスジャギイは同じ種の小型肉食モンスター、ジャギイを数頭つれ俺を取り囲み、ピヨンピヨン跳ねていた。

「……囲むなよ」

俺の周囲にはドスジャギイ一匹、ジャギイ三匹。

をつむと付けて、家に帰つて寝たい……。

「グオオツオツオツオツオツ！－！」

その時、ドスジャギイがひときわ田立つ鳴き声を放つた。

そして、ジャギイ三匹が一斉に飛び掛かつてきた。

「……来るかつ－！」

俺はまず始めて田の前のジャギイに狙いを定める。

飛び掛かつてくるジャギイの動きは単調だ。

咄嗟にジャギイの着地地点を計算し、その場から離れる。

そして数瞬の後、見事に着地したジャギイにすぐさま刃を向けた。

「つおおおおおおおつ－！」

右と左の回転斬撃、そして切り上げ。

その3回の斬撃でジャギイは吹っ飛んだ。

と、同時に後ろからもジャギイが接近してきたのを確認。

その場から咄嗟に回転回避、そして後ろに着地したジャギイを視界に捉え、切つ先をジャギイの喉元に向け双突きを放つた。

「グアツ！－？」

突然の事に悲鳴をあげるジャギイ。

生憎モンスターに同情していたら狩猟なんて出来ない。

俺はそのままジャギイの喉元を斬つ裂いた。

その瞬間、真っ赤に染まる双剣。

「グギヤアツ！」

そして最後、二匹目のジャギイが正面から突撃。

俺は右へ跳躍。

そのまま刃を突きだし、真横にいるジャギイの腹へ強烈な斬撃を放つ。

右足に力を入れ、腕にもありつたけの力を入れ、そして一気に斬り裂いた。

「……ふう

俺の周りには二匹のジャギイの屍。

目の前には、こちらに威嚇行動とばかりに低く鳴くドスジャギイ。

「……行くぞっ」

俺は呼吸を整え、一気にドスジャギイへ接近。

「グオオオオオオオッ！」

一方のドスジャギイは姿勢を低く構え、身体側面をこちらに向ける。

あれは……

「体当たりかっ！」

俺はすぐさま攻撃を中断し、横へ跳んだ。

刹那、先程まで俺がいた場所に放たれた、強烈な体当たり。

「あ……危ねつ！」

例えボロス装備の俺が初級レベルの大型モンスター、ドスジャギイの体当たりを食らつても、即死レベルのダメージを食らう事はない。

だが、それでも痛いものは痛い。

極力食らいたくはないものだ。

「グオオツオツオツ！」

ドスジャギイの咆哮が辺りに木霊する。

「……なめられてるな、俺

俺は改めて双剣を構え直し、ドスジャギイをしっかりと視界に捉える。

背中を汗が伝う感覺。

自然と心臓の鼓動が早まる。

呼吸が荒くなる。

空気を吸い込む度に、肺がゅつくりと軋む。

……」これが狩猟だ。

……」この感覺こそ、ハンターだからこそこの感覺だ。

「グオオオオオアアアツー！」

その瞬間、ドスジャギイはその太い尻尾を鞭のよつに回転させ、強力な回転体当たりを放ってきた。

俺は後ろへ跳躍し、虚空を斬る体当たりが収まったのを確認し、一気にドスジャギイへと斬りに掛かつた。

俺はぐつと双剣を持ち直し、ドスジャギイに向かって斬りに掛かつ

「……行くぞー。」

そろそろ決着をつけないと、スタミナがヤバい。

かくいう俺も傷だらけではないが、呼吸は荒く疲労困憊。

身体は呼吸の度に激しく上下し、その口元からは唾液が滴り落ちていた。

田の前に立るのは、全身傷だらけのドスジャギイ。その立派なエリマキは破壊され、ぼろぼろになったエリマキには、もうその風格はない。

そして、時はきた。

「ふう……まだ倒れないのか」

た。

その場から前方へ跳躍し、両刃をドスジヤギイへ垂直に叩き込む。

「グオオッ！？」

こちらの素早い攻撃に反応の遅れたドスジャギイ。

その一瞬の隙を俺は見逃さない。

ドスジヤギイの腹に乱舞を繰り出す。

- १ -

全方位からの 霧雨のよこな軽撃

その1撃1撃がしてかりとアスジヤギイの身体を捉え、そして確実にダメージを与える。

流れる斬撃。

それは、まるで舞いの如く

「エホエホエホエホエホエホエホツ！」

卷之二

その時、今まで一齣の咆哮をあけたドスジヤギヤ

瞬間、ドスジヤギイの口が俺の目前にまで接近。

噛みつき攻撃。

無数の牙が目の前に。

「つあつー？」

俺は咄嗟の事に一瞬反応が遅れ、ドスジャギイの牙が右腕をかすった。

「ひいっー！」

さすがにヤバかった！

ボロス装備の防御力万歳！

幸い、装備に多少の傷が出来た程度で済んだ。

「くそつ」

俺は一瞬の恐怖を振り払い、目前のドスジャギイの頭目掛けて再び刃を刺す。

「グオオオオオオ！」

ドスジャギイの悲鳴。

渓流に木靈したその声に、狩獵開始当時の霸氣はなかつた。

「もりつたッー！」

俺はそのまま乱舞へ持っていく。

風を切る音。

そして、俺の叫び声。

腕にありつたけの力を込め、一気に斬り裂いた。

「グアオオオオつ！」

しかし、ドスジヤギイは倒れない。

斬られながらも、ドスジヤギイは両足に力を入れ、またしても体当たりの構え。

「……まだなのかつー！」

仕方なしに双剣を一旦納め、後方へ引く俺。

今の状況で体当たりは食らいたくない。

ドスジャギイは全身に力を込め、バネのように身体を向け、飛び掛

ヒュンツ!

刹那、虚空に叩く体当たり。

そして体当たり後の僅かな硬直時間。

俺は双剣を構え、再び乱舞。

ପାତା ୧୦୦

これで決める！

そして

「まあまあまあ、おー、こんどはー。」

見事、俺はドスジヤギイの素材をたんまりと持ち、村への帰路につ

いたのだった。

第3話・VS 狗竜1（後書き）

もつう話なのヒロインが登場していなし事實。

次回は出ます、こや出します（汗）！

むと苦しい狩りシーンばかりだと、描いてる方もツラいから……。

なので……うん、もつうっとおできでトセーな！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7664z/>

モンスターハンター・シスターズ

2011年12月26日21時47分発行